
めだかボックスのおはなし 2

キイナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

めだかボックスのおはなし2

【Nコード】

N0746Z

【作者名】

キイナ

【あらすじ】

あるおんなのこのおはなし。

『どーでもいいけど』（前書き）

1とは関係ない。

『どーでもいいーけど』

「んー。あー。今何時かなー」

少女はベッドから起き上がらないまま、時計を確認した。

時計は午前6時前を指していた。

「んー……………。よっこらせ」

面倒くさそうに立ち上がると大量の制服が入っているクローゼットから制服を出した。

少女はそれをしばらく見つめると、嫌々着た。

「そーか。今日は新生徒会長の発表があるんだっけ。どーでもいいけど」

『どーでもいいけど』

それが彼女の口癖だった。

少女はそのまま、朝ご飯を食べることなく、家を出ようとした。

「いつてきまーっす」

少女はそれだけつぶやいて、扉を開けた。

『どーでもいいーけど』（後書き）

『完全完璧』

この世に存在する能力全てを使用可能。

そついう物語を作ろうとしたけど、やめた。

『とても奇妙な』

ほんのり明るい空を見上げながら、少女は呟いた。

「もうちょっと早く家出ればよかったなあ」

今はちょうど6時頃。

学校へ行くのには早すぎるくらいだ。

少女はゆっくり、ただゆっくりと歩く。

少女の外見に、その制服がとても似合わなくて。

少女自身もどつやら自覚しているらしかった。

「あー、やだやだもつとまじな制服ないのかよー」

くるりくるりと少女が回り、そして、その度に彼女の白い髪が揺れる。

「やば、髪が崩れる……」

少女は髪を抑えて止まった。

まるで少女の髪型ではないような、それはまさに『オールバック』
とかいう類だろう。

しかし、少女には異常なほど似合っていた。

「あーあーあー。また遅れちゃうぜー。しつかたない、早めるかー。
まあ、どーでもいいーけど」

そっついながらも、少女はくるりくるりと回った。

見えてきた、『箱庭学園』が。

少女の名前は白神燕。しろかみ つばめ

とても奇妙な人間であつた。

『気持ちだけ』

燕が学園に着いた時、もうすでに生徒達は随分登校してきていた。

「やったね、遅刻じゃない！」

と、校門をジャンプして通ろうとした時。

「ちょーっと待ったあー！」

「あん？」

「な、なんなんですか、その髪型は！正しくありません！ふさわしくありません！」

「ああ、誰？」

「風紀委員の鬼瀬針金です！！今すぐ正してください！」

「ごめんなさいねー。先輩だが、同級生だか分らないけど、これねー。無理なんだよ」

「ななななんということですか！いいから今すぐに………」

「だーからー。逆に聞けどー。正しいってどんな感じなのー？」

「それは………」

「具体的によろしくー」

「まずですね…………そのオールバック……………ですか？それをどこにかしてください！それからその髪の色！それを……………」

「ああ、これね、地毛」

「地、地毛！？」

鬼瀬が若干後ずさる。

「ああでも髪型のことは『気持ちだけ』受け取っておきまーっす」

それだけ言うと、ひらりと鬼瀬を避け、さっさと学園の中へ入ってしまった。

「な……………なんなんですか……………？あの人……………」

『気持ちだけ』（後書き）

髪の色と目の色は、絶対一緒。

これは絶対。

『正反对だね。』

パチパチパチ……………

拍手が鳴り響く体育館で、燕は隅っこの方で体育座りをしていた。

「生徒会長、黒神めだかかあ。うーん」

「私と、正反対だね。」

「!？」

めだが、何かに反応した。

「どーでもいいんだけどね」

燕は立ち上がり、スカートを軽く手で払った。

「やれやれ、これからどうしようか。また理事長んとこ行かなきゃだね」

燕は、1人で体育館から出た。

めだかは、燕が見えなくなっても、燕が居た場所を見つめていた。

「めだかちゃん、あまり私を怒らせないようにね」

燕が体育館から出るとき、そんな言葉をぼそりと発した。

「ふむ、どうやら、厄介な生徒がいるようだな………」

『冗談でしょ』

「理事長ー？」

「ああ、燕さんですか。どうぞ」

理事長と呼ばれるその老人は、燕と自分のお茶を用意しながら、燕の入室を促した。

「理事長。私の教室は、いつになったら造ってくれるんですかねえ」

「ええ、例のアレに協力してくれたら、どんな教室でもお造りしますよ」

微笑みながら老人はお茶を飲む。

「あっそう、なんか交換条件みたいな、私、嫌いなんですけど」

「そう言われなくても、わたしにだって譲れないものはあるんですよ」

「……………へ……………。格好いいじゃん」

「わかったわかったわかりましたよ。協力？でしたっけ。すればいいんですよ」

「ありがとうございます」

「ただし、あくまでも、協力。ですから」

燕は立ち上がり、ドアへ向かった。

「それから……………制服。どーにかならないんですかね」

「生徒会に入ればいいんじゃないですか？」

「……………冗談でしょ」

静かになった理事長室で理事長はため息を吐いた。

『姉さん』

「やれやれよっころしょ」

燕が起きたのは午前5時を少しすぎた頃。

「たまには朝ご飯、食べて行こうかな……………」

妙に綺麗なテーブルを見て、燕は言った。

もぐもぐとパンを食べながら、先程着る為に壁に掛けた制服を見て、燕はため息を零した。

やはり制服だけではどうしても諦め切れないらしく、ここ最近ずっと悩んでいた。

「もう一回理事長に相談してみようかな……………」

やはり、ため息を吐いた。

「5時30分……。そろそろ行こうかな」

立ち上がり、制服を着て、玄関に向かう。

ふと、玄関の棚にある写真立てを見つめて。

「姉さん……………」

一言だけ、呟いた。

『危ないからね』

廊下をふらふら歩いていると、何やらもぐもぐと口を動かしながら近づいてくる人物がいた。

「……………誰？」

「あひゃひゃ、あたしは不知火半袖！」

「へー。それで？」

「あんださあ。何がしたい？」

「は？」

「なんでだろうねえ。どーしてもあんたにこの学園から出たってもらわないといけない気がするのさ」

不知火は、手に持っている袋から食材を取り出しながら言った。

「おじいちゃんから聞かなかった？私をあんまり怒らせないほうがいいって」

「知ってたんですか 理事長があたしのおじいちゃんだって」

「まあそういうことで」

「生徒会に気を付けな。危ないからね」

「どーも」

燕は手を振りながら、去って行った。

「変な奴っ」

『仕方ないなあっ』

「水中運動会？」

燕はまた理事長室に居た。

「ええ、また何か始まるようですねえ」

「ふうん。どーでもいーけど」

「どーでもよくはないんじゃないんですか、燕さーん」

「なんだっけ、ああ、不知火か」

燕の横にすわる不知火。

「まああれだね、わたしは出ないしー。関係無いしねー」

「まあまあそう言わずに 見に行くだけ行ったらー？」

「仕方ないなあっ」

「ついでに、生徒会の方とも仲良くするのも良いですよ……………」。
何か、ご要望はありますか？」

理事長が聞く？

「要望？そっだなあ……………」

『補欠』

「生徒会に、入りたい」

「……！……なるほど……」

理事長は、冷静を装いお茶を飲んだ。

「いいでしょう。生徒会長には、私が連絡しておきましょうか？」

「あー。よろしくお願いします。それと……」

「それと……？」

「私はただ、入りたいだけ。私になりたいのは、『補欠』」

「…………ええ、わかりました。お話、しておきましょう」

「どうも」

理事長は、意外な発言をした燕にひとつ、質問をした。

「もしや、例のアレも、補欠、と？」

「もちろん」

ニヤリと笑って、燕は立ち上がった。

「大丈夫。協力はしますよ」

もう一度笑うと、燕は出て行った。

『人を、人間を』

「と、言う訳でー、今日からこの白神燕が、生徒会役員補欠でーす。
どーぞよろしく」

「どーいうわけだよ!」

生徒会役員庶務の、人吉善吉のツッコミを聞いて、とても嫌そうに
善吉を睨む。

「理事長から聞いてねえのかよ………………。全く……………」

「……………ああ、そういえば、なんか来るとか、言ってたな。お前が
そうか……………」

「物分りいいー」

とても面倒くさそうに答えてニコニコと笑う燕は、今までの燕とま

るで別人だった。

「俺は庶務の人吉善吉だ。よろしくな」

「俺は書記の阿久根。よろしく」

あれー？なんだかなあ。

何ちよつと格好つけてるんだろうか。

この人プリンスなんじゃないのー？

ま、どーでもいいけど。

「私は白神燕、どーもめだかちゃん。良かったね。『私と会えて』。」

「……………」。

「まあ、どーでもいいけど」

「どうでも良い訳が無いだろう。貴様は、何故私とそんなに違うのだ?」

「そう思っているうちは、ずーっと違うまんまだよん」

しばらく、沈黙が続いた。

そして、その空気を破ったのが、善吉だった。

「なんなんだよ………………。お前、何がしたいんだよ……………」
「……………」

燕は、これまでにない笑顔で言った。

「人を、人間を好きになりたい!!!」

『捨てはしないさ』

しばらく、沈黙が続きそして、善吉が口を開いた。

「意味わかんねえよ、お前」

「うつわせっかく真面目に答えたんだけどなあー！」

不機嫌そうに叫ぶと、くるりとめだかを振り返った。

「めだかちゃんー。私とあなたは、違う。だからこそ、会えて良かった、かな」

にこにこ、楽しいのか楽しく無いのか分からない表情で、燕は語り続ける。

少しだけ、戸惑うそぶりを見せながら。

「私が考えただけで、根拠は無い。けど、私が話したいから、話す。いいでしょ？」

めだかが、答えた。

「……………ああ、貴様も今日から生徒会役員だ。思っ存分吐き捨てるがいいー!」

「捨てはしないさ、ただ……………少し理解はして欲しい」

燕は、嗤^{わら}う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0746z/>

めだかボックスのおはなし2

2012年1月14日21時45分発行